



に授かったといつた。

詳しい事情は省くが、だてやすいきょうではなさそう。本人にはかなりさしせまつた事情があつたらしい。

K氏の大学合格のニュースは少なからず波紋を投げかけた。K氏の周りに時ならぬ学習フォームを引き起こした。カルチャースクールに通う者、通信教育を受ける者。

私自身も大学を除籍になり、アカラミツクなものとは全く無縁に過してきた。美生活の中で学び実践してきた——といふカソコソいだが、実際は仕事の筋に走つてきたにすぎない。慰めるわけではないが、好きな仕事があつただけマシだった。

大学と聞いてもさうさうという気がしないではない。しかし、私も40代に入った。ガむじやらに走る時代は過ぎたかもしれない。今いざ、自分の足もとを見つめ直し、これからの行く末を考え直す時期にきているのではないかと、K氏の顔を思い浮かべながら考えた。

(二宮市在住 オフィスマスマン主宰)

ある秋の日のこと

14回生 竹田 繁良

西校時代、私はテニス部に所属していました。忘れもしない二年の秋、一言市民戦のニュース。一回戦敗退の私は、友人一(聞くところによると、彼はテニスに対する未練捨て難く、今だに母校の西校で教鞭をとりながらテニス部の顧問をしておるそつな。)と、エ、マネージャーの女と三人で、岐阜の金華山に登った。とは言つてもロープウェイでだ。一もくも私も一回戦落ちたあつた為、その落胆測り知れず、お互い

の心のキスを紙め合つかの様に、二人で行くのではないかと話はずに纏まつた。そこへ応援に嫌気がさしたSが「私も連れてつて。」とさるるをあげた。私たちが目が点になった。金華山と言へば、かの織田信長のゆかりの地。そこへ女と来たとおつては、信長公も我々の事を軟弱者扱いはせぬかという危惧の念に駆られた——と私であつたからだ。然し日頃のSには見られぬ烈しい口調に、私達は折れた。四人連れで「ケツク」を滑りてやつたどろり着いた頃はもう秋の夕暮れ。頂上からは素晴らしい眺めが開けていた。四人の目に言い知れぬ涙がキラと光つた。遠距離はるばるやつて来て、やつと頂上へ登つた充実感からか。いや違う。なぜなら私達はロープウェイという安易な手段を使つて登つたからだ。恐らくは風が冷たく目に沁みだしたら涙が出てきたのだと思つ。みんなそんなたわいもないことがなぜかしら無性に楽しかつた。濃尾平野に采期の健闘を誓い、再びロープウェイで下山した。みんなの口から「かへや姫」の一曲がこぼれた。

(東京都在住 竹田商店経営)

母校の教壇に立つて

17回生 立沢秀樹

私はこの四月に、一言南高等学校から母校である西高へ転任して来ました。久しぶりに西高の校門を入り学校の中を歩いてみると、十年ほど前のことがいろいろと思ひ出されました。

私の西高在学中の思い出といえは、山部部のアレーニアで校舎の裏の非常階段を重いリュックを背負つて上り下りしていた

と、西高祭でのマスコット作りや応援の練習、真夏の暑い教室で受けた補習授業など、あければきりがありません。

また、西校に赴任してきて、目についたのは、先生方が生徒個人の能力を最大限に引き出すために、いろいろ工夫されているといつことです。補習授業、早朝の確認テスト、添削指導、個人面談、進路検討会など、自分が生徒であつたときには見えなかつた先生方の苦勞もよくわかりました。また、生徒もそれに応えて一生懸命努力しており、毎日授業後には、職員室のあたりこちりで、先生に質問している生徒の姿が見られます。

学校群制度が廃止され、複合選抜が実施されても、西高が大学進学において、立派な成績をあげ続けているのも、先生方のこのようなきめ細かい学習指導、進路指導と、生徒諸君の努力の成果なのだと改めて感じました。

私は今、自分の母校である、この西高の教壇に立つことばてきこも嬉しく思っています。

前任校で得た知識を生かし、6年前に初めて教壇に立つたときの気持ちを思い出し、先生方と協力して自分の後輩達のために頑張つていきたいと思ひます。

(祖父江町在住 今年からの母校に勤務)